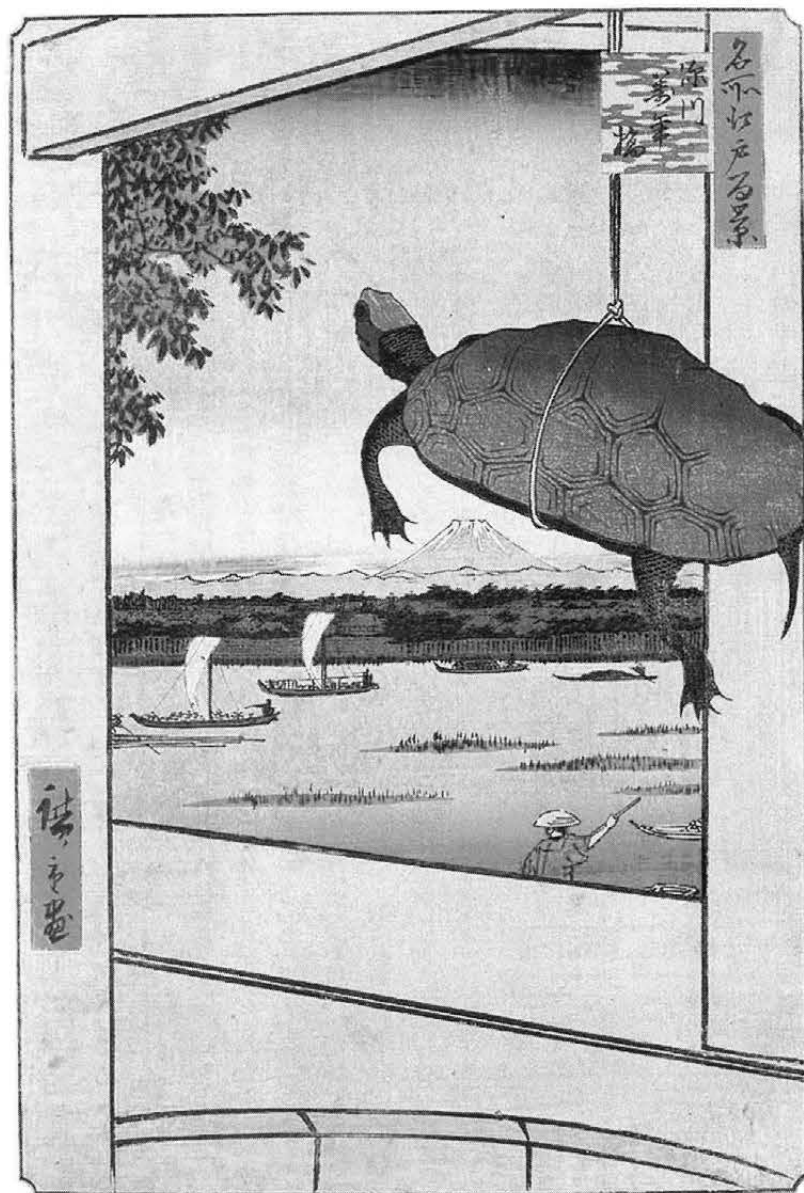


歴史と文化を考えよう

'02 江東区文化財保護強調月間



「名所江戸百景 深川万年橋」(歌川広重)

深川図書館蔵

下町文化

NO. 219
2002.9.27

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.tokyo.jp/bunkazai

■'02江東区文化財保護強調月間

●旧大石家住宅特別公開
時雨忌講演会

●民俗芸能大会 公開講演会

●伝統工芸展 歴史さんぽ

●船番所取調一件④
★河川通船と利根川筋

●江東外見発見伝
★九品仏浄真寺の接待茶釜

●江東今昔(5)
★愛宕神社前通り

今年もまもなく文化財保護強調月間を迎えます。教育委員会では「歴史と文化を考えよう」をテーマに、10月2日から11月3日までの1か月間、さまざまな催しをおこないます。地域の歴史のなかではぐくまれてきた民俗芸能や伝統的な「技」の数々をご覧いただきます(今年度は殺虫・燻蒸サービスは行いません)。

是非この機会に、江東区の歴史と文化にふれてみてください。

公開講演会

10月2日(水)

◇「江東区の集合住宅

―こしかたとゆくすえ―

旧大石家住宅特別公開

10月5日(土)～14日(月)

◇「大石家が伝えた御札」

10月20日(日)

民俗芸能大会

◇「木場の角乗」

◇「木場の木遣」

◇「砂村囃子」

◇「富岡八幡の手古舞」

◇「深川の力持」

伝統工芸展 10月30日(水)～11月3日(日)

◇実演公開

◇職人教室(技の体験)

◇チャリティーバザール

歴史さんぽ

11月2日(土)

◇「本所・深川の歩みを探る」

旧大石家住宅特別公開

10/5(土)・10/14(月)

「大石家が伝えた御札」 おふだ

旧大石家住宅は、150年以上前に建てられた区内最古の民家であり、区の指定有形文化財となっています。

普段の公開日は土・日曜と祝日ですが、文化財保護強調月間の期間中に限り、特別に平日も公開いたします。あわせて、今回は大石家の屋根裏に残された「御札」(祈祷札)の特別展示を行います。庭にはベゴニア、座敷にはめんこ・おはじきなど昔懐かしいおもちゃも用意してあります。

御札とは、神社やお寺で配られる護符の一種です。普通は神棚や仏壇に納めたり、門や戸口、柱、天井などに貼り付ける比較的大きなものを指します。大石家の場合は、屋根裏の登り梁の間に小屋組みをして箱の中に安置されていました。古くなった神札をまとめて屋根裏にしまっておくことを「千枚札」と言います。御札が千枚たまると火事に遭わないという俗信です。

大石家の場合、表のような各寺社の御札が残されていました。関東の著名寺社名



寺社名(通称)	枚数
成田山新勝寺(成田不動)	184
平間寺(川崎大師)	17
豊川稲荷	1
成田山神光寺	13
役流山不動院(鉈切不動)	8
深川泉養寺	4
亀高山大師堂(持宝院)	1
正覚山安樂寺	1
金村別雷神社	3
高尾山薬王院	1
西新井総持寺(西新井大師)	3
天照皇太神宮	21
富士巖浅間神社	1
龍媛神社	1
香取大神宮	1
不明	9

な寺社やむかし区内にあったお寺などが見えます。なかでも成田山新勝寺のお札が180枚と一番多いことがわかります。大石家の成田詣がいつからいつまで続いていたのかは不明ですが、御札にも名前が見える昭和9年(1934)に亡くなった大石政五郎さんは、大島・砂町周辺の成田山講「八日講」の世話人だったようです(持宝院文書)。創建年代のはっきりとはわからない大石家にとって、成田山のお札は貴重です。つまり、年に何度も同じ寺社か

らお札をもらわないだろうとの前提に立てば、少なくとも150年間位は経ているだろうと考えられるのです。これは、安政年間(1854〜60)を少し遡る頃に建てたとの言い伝えにも合致しています。

どうぞこの機会に大石家の歴史を体感して下さい。

場所 旧大石家住宅(南砂5-24地先)

仙台堀川公園内ふれあいの森

時間 午前10時〜午後3時

強調月間協賛事業

時雨忌講演会

10月12日は松尾芭蕉の命日です。芭蕉記念館では、この日にちなんで記念講演会を開催します。

日時 10月13日(日)午後2時より

会場 1階会議室

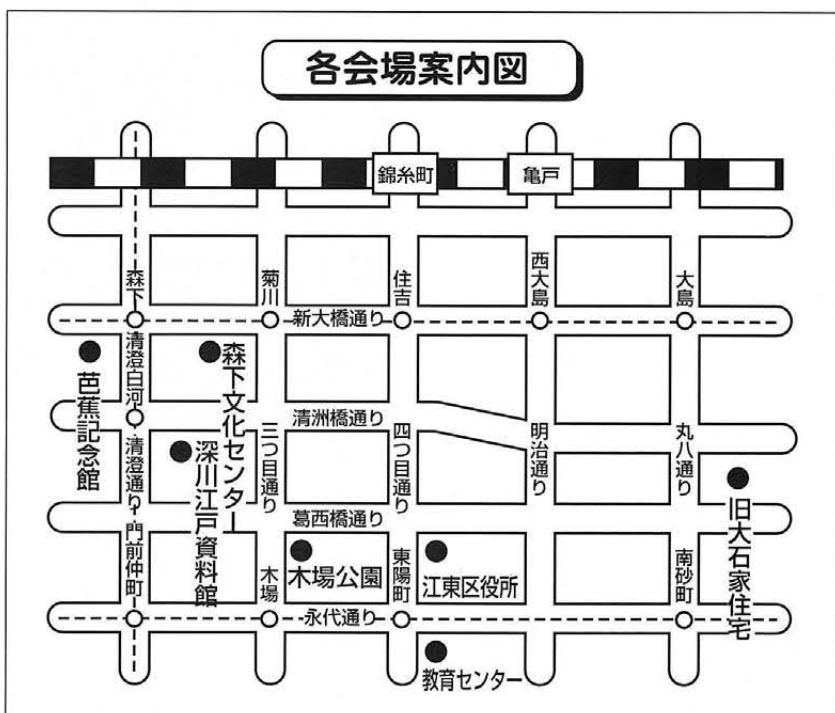
演題 「芭蕉の転機」

講師 「炎環」主宰 石 寒太

申込 記念館窓口または電話にて

☎3631-1448

各会場案内図



問合・申込先 生涯学習課文化財係

住所 〒135-8383 江東区東陽4-11-28

☎3647-9819 (直通)

公開講演会 10/2(水)

聴講無料

江東区には日本初の公営集合住宅を

始め、震災復興政策の同潤会アパートなど多くの集合住宅がありました。江東区の集合住宅の歴史を通して、文化財保存のあり方を考えます。

演題 「江東区の集合住宅

―こしかたとゆくすえ―

講師 江東区建造物調査団 堀内仁之

日時 10月2日(水)

午後6時30分～8時30分

会場 教育センター1階 大研修室

定員 20人 申込 電話(先着順)

民俗芸能大会 10/20(日) 区民まつり

江東区で江戸時代に生まれ、受け継がれてきた民俗芸能を一堂公開いたします。

民俗芸能は、仕事や日々の生活のなかから生まれたもので、木場の川並(筏師)をはじめた角乗や労働歌の木遣、佐賀町の倉庫街で働く人がはじめた力持、富岡八幡宮の祭礼を彩ってきた手古舞、さらには農村地帯の砂村で生まれた砂村囃子など、いずれも地域に根ざした芸能と言えます。



木場の角乗

起源については不明ですが、江戸時代に木場の筏師(川並)が水に浮かべた材木を、鳶口ひとつで乗りこなし、筏を組む仕事の余技から発生しました。

木場の木遣

木遣とは、木を切り出したときに歌う作業歌です。その始まりは慶長初年に遡ることが出来るともいいます。

なお、木遣りとともに百万遍(大数珠を繰って念仏を唱える)をしながら歌う「木遣り念仏」は珍しいものです。

砂村囃子

由来については不明ですが、地理的に葛飾区に近いところから葛西囃子と



富岡八幡宮の他には浅草の三社祭にのみ伝承されています。

深川の力持

由来については定かではありませんが、江戸時代、各地の大名が自領の藩米を江戸に廻送し、それを蔵前(台東区)の札差(米問屋の仲買)に任せていました。この札差のもとで働く者たちが、力自慢を見せるようになり、曲芸をともなって今日の力持になったと考えられます。深川佐賀町は隅田川沿いに位置し、物資の集積地であったことから力持も盛んだったのでしょう。

現在は、それぞれの保存会(睦会)が技を守り伝えています。この機会に、是非ご覧ください。

* *

演目次第(予定)

午前11時～12時30分

「木場の角乗」

木場角乗保存会

午後1時～3時40分

「木場の木遣」

木場木遣保存会

「木場の木遣念仏」

同

「砂村囃子」

砂村囃子睦会

「獅子舞」

同

「富岡八幡の手古舞」

富岡八幡の手古舞保存会

「深川の力持」

深川力持睦会

※会場は都立木場公園

伝統工芸展 10/30(水)〜11/3(日)

入場無料

江東区の工匠と現代に生きる伝統工芸品の数々を紹介！

会場 森下文化センター（森下3-12-17）

時間 9時〜17時（最終日は16時まで）

わたしたちの住む江東区は、江戸・

東京の消費生活をささえる商工業地域として発展してきました。そのなかで、昔からの技術を伝えるたくさんの工匠（職人）が生まれ、その技術を現代へと伝えてきました。

伝統工芸展は、無形文化財（工芸技術）の保持者として登録・指定されている工匠たちについて、その技を公開し、技から生み出された作品を展示するもので、今回で21回目になります。

現在、保持者に認定されている件数は44件ですが、亡くなった方を含めると100件近くにもなります。伝統工芸について知っていただくため、森下文化センター2階には「工匠番館・工匠式番館」という展示施設を設けていますが、工匠の伝統的な技を目の当たりにする機会はほとんどありません。伝統工芸展で多くの作品や技の実演を通して実感していただきたいと思いま

江東区と伝統工芸

江東区に残るたくさんの伝統工芸は江東の発展の歴史と深い関わりがあります。

天正18年（1590）、関東に入学した徳川家康は、江戸の建設のため、職人を集め、日本橋あたりに住まわせました。そして、江戸が拡大するなか



職人教室（提燈 杉田礼二）

で、深川や小名木川・横川などの堀沿いの地が町場化し、職人や商人が移り住むようになります。

とくに、寛永18年（1641）の大火により、木置場が日本橋から隅田川をはさんだ元木場（佐賀町あたり）に移り、また木置場で働いていた職人や、木材を材料にする職人も一緒に移ってきたことが、江東区に多くの職人が住むようになった理由でした。

江戸時代、江戸の消費生活を支える商工業地としての原型ができ、明治以降には近代的な大工場が建設されて工業地帯として発展していくなかで、機械にはできない手仕事をにうことにより独自の技術をみがき、今日まで続く伝統工芸が形成されました。

江東区の工匠たち

江東区の工匠の最も大きな特徴は、生活に密着した道具をつくる職人が多いことです。そして、職人の仕事は、地域の特性と結びついて発展してきました。

江東区は堀が多く、また海辺に近かったことから、清澄1〜3丁目あたり



江戸切子（小林英夫）

には船大工が多く住み、町名も海辺大工町と称しました。釣竿をつくる竿師や投網をつくる職人もいました。大島1丁目には、江戸時代のはじめ、近江国の鋳物師、釜屋六右衛門・七右衛門が移り住んでいます。

また、染織やガラス工（江戸切子）なども地域の特性を活かして発展してきた職種です。以前は堀を利用して、反物を洗い流す姿がここかしこで見られました。ガラス工は、堀が材料の運搬に便利なことから集まってきました。

江戸時代より置かれた木置場のまわりには、材木や廃材・小片を利用した木工・漆工関係の職種が発展しています。

文化2年（1805）の亀戸村には、桶掛・左官・木挽・飾師・煙管張・石工・建具師・萱屋根草・大工・曲物師

・宮職がみられます。さまざまな職種
の職人がみられることは、亀戸村が純
粋な農村とは異なり、江戸に近かった
ことや、亀戸天神などの行楽地を抱え
ていたことによるものでしょう。

両国に近いこともあり、相撲取りの
足袋や化粧廻し、そして軍配をつくる
職人がいることも特徴のひとつです。

現代の機械化された社会のなかで、
大量生産により私たちの日常生活はゆ
たかになる一方、均質なものになっ
てきました。そのなかで、多様なライフ
スタイルを求める人が増え、人とは違
うものを求める傾向が強くなってきて
います。そこで伝統的な技術によって、
一つひとつ手仕事で作られた工芸品に
より、生活に潤いをもたらすこともよ
いのではないのでしょうか。

実演公開

期間中、会場では職人さんの仕
事を間近に見ることが出来ます。
日ごろ、見ることでできない職人
さんの仕事ぶりに接しながら、お
話を楽しんでいかげでしょうか。

実演時間は次の通りです。

10/30～11/1 9時～15時

11/2～11/3 11時～15時半

別表の日程表をご参照のうえ、
お出でください。



実演（刺繍 天野一政）

期間中、森下文化センターの1階ロ
ビーでは、江東区伝統工芸保存会によ
る工芸品の即売
がおこなわれま
す。販売してい
る方たちも職人さ
んですので、気
軽にお話をしな
がら、じっくり
とご覧になって
ください。ぜひ
お立ち寄りくだ
さい。

職人教室（技の体験）

11月2日・3日は、職人さんの仕事
を体験することが出来ます。直接、職
人さんのアドバイスを受けながら、2
時間ほどで作品を作り上げていきます。
世界にたった一つだけのオリジナルで
す。モノを作ることの難しさと、出来
たときの喜びを味わってください。

体験の時間帯は、両日とも11時から
15時半となります。内容については日
程表をご覧ください。

また受け付けは当日の申し込みとな
ります。開始前に会場アナウンスをい
たしますので、受付にてお申し込みく
ださい。なお教材費がかかります（5
00～2000円ほど）。

チャリティーバザール

平成14年度伝統工芸展日程（予定）

日時	11/1(金)	10/31(木)	10/30(水)	日時
9時～10時半	仕舞袴製作 杉浦 武雄	木工（指物） 山田 一彦	江戸切り子 須田 富雄	
10時半～12時	刀剣研磨 白木 良彦	刀剣研磨 白木 良彦	べつ甲細工 磯貝 寛	
13時半～15時半	木工（建具） 木全 章二	裁着袴製作 富永 皓	手描友禅 和田 宣明	
11時～13時	木工（彫刻） 岸本 忠雄	木工（指物） 山田 一彦	江戸切り子 須田 富雄	
13時半～15時半	木工（建具） 木全 章二	裁着袴製作 富永 皓	手描友禅 和田 宣明	
11時～13時	木工（彫刻） 岸本 忠雄	木工（指物） 山田 一彦	江戸切り子 須田 富雄	
13時半～15時半	木工（建具） 木全 章二	裁着袴製作 富永 皓	手描友禅 和田 宣明	

※ ○印は体験受け付け可能。

歴史さんぽ 11/2(土)

「本所・深川の歩みを探る」

徳川家康の江戸開府以来、本所と深
川は一体化した地域として発達してき
ました。深川発祥の地（深川神明宮）
から両国周辺を探索し、本所・深川の
成り立ちとその歩みを探ります。必ず
新しい発見があるはずですので、是非
ご参加ください。

日時 11月2日(土) 午後1時～3時半
集合 森下文化センター（両国駅解散）
講師 深川江戸資料館学芸員

定員 30人（申込多数の場合抽選）
参加費 保険料30円
申込 往復はがきに、住所・氏名・電
話番号を明記のうえ、文化財係
までお申し込みください。

締切 10月23日(水) 必着

河川通航と利根川筋

これまでの3回は、中川船番所の機能およびその周辺地の話が中心でした。

今回は、少し範囲を広げて、利根川から江戸川と利根川の分岐点に位置する

関宿^{せきやど}まで目を向けてみたいと思います。銚子方面からの荷物は、利根川

を通り、関宿そして中川番所を通過して、江戸に入りました。その利根川が

「川の道」として、通航機能を維持してきた背景について、その一端を考えて

みたいと思います。

現在、多くの河川は、大雨や渇水などに対応するため、ダムや堰などを設けて水量を調整しています。ところが、江戸時代にはそのような施設はありません。そこで、場所によっては、常に川底に注意しつつ船を進めなければいけません。このシリーズの2回目の小名木川の川^{かわ}底では、川に堆積した土砂を取り払い、川底を深くするという多くの努力によって、川としての通航機能が守られていたということでした。利根川筋では、どうだったのでしょうか。

ここでは、まず銚子から荷物を積ん

で、利根川を通り、江戸に搬送するには、どのようなルートがとられたのか、鮮魚を例に話をしましょう。

『利根川図志』には、銚子浦から鮮魚を積んで江戸へ行く船「鱸船」（なまぶね）の記述がありますので、少し引用してみよう。

「舟子三人にて日暮に彼処を出で、夜間に二十里余の水路を溯り、未明に布佐、布川^{ふがわ}に至る。特この処を多しとす。故にその賑他^{にぎわい}処に倍し、人声喧雜肩摩^{かみす}り踵^{かかと}接し、傾くる魚は銀刀（銀濤。波頭の白波）を閃し、鉛錘を投げ、簀葉（熊笹の葉）を翻して、一時の佳景と称するに足れり。而して冬は布佐より馬に駄して、松戸通よりこれを江戸に輸^くり、夏は活舟^{いけふね}を以て、関宿を経て日



「当今相場」（油・干鰯・魚油・粕等に付）（『宮城家文書』千葉県文書館収蔵）

本橋に到る。」

この記述には、利根川沿いにあった布佐と布川の河岸^{かし}の賑わいぶり、よく表されています。また、冬は布佐から馬に積んで松戸へ出て、ふたたび船で江戸に向かったのに対し、夏は活舟で関宿回りで江戸川を下り、日本橋に到ったことがわかります。

もちろん利根川を利用して江戸に運ばれた荷物は、鮮魚以外にもいろいろありました。

そこで、次に銚子方面と深川のつながりについて、宮城家文書（銚子市高田、千葉県文書館収蔵）の目録解題から若干確認しておきたいと思います。

*

宮城家は、下総国海上郡高田村にあった高田河岸で廻船問屋を営んでいました。高田河岸を通して、銚子方面から、深川へも多くの物資が送られてきました。その中心となる商品は、九十九里地域の漁業生産物でしたが、ほかにも塩・米など食料品が多かったようです。物資の集積地といわれるだけあって、取引相手として登場する人物も深川には多いですが、なかでも深川東大工町の岩出屋惣兵衛と深川西永代町・北新堀町の喜多村富之助が際立って多く、商品輸送（買付）の依頼や相場調査依頼など、宮城家に届けられた文

書は多種多様です。その枚数は、岩出屋が明治5〜14年の間に283通、喜多村が明治8〜18年の間に187通で、いかに情報収集に努めていたかがわかります。

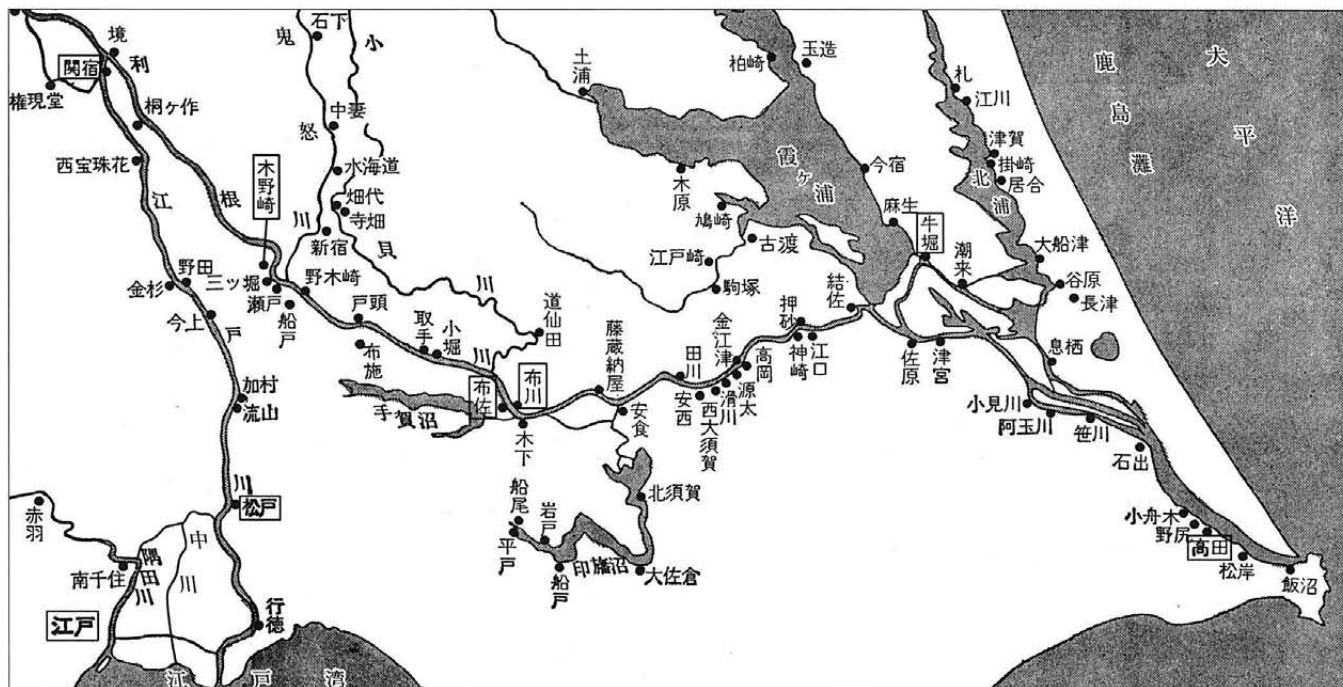
*

しかし、利根川といっても場所によって浅瀬などがあり、川^{かわ}底いも必要だったようです。そのことについて常陸国行方郡牛堀村の庄屋であった須田家（茨城県行方郡牛堀、茨城県立歴史館蔵）の文書から見てみたいと思います。

享保18年（1733）の年号をもつ「差上申一札之事」は、牛堀村の船主が郡奉行に提出したものです。史料は、関宿辺りの河川の「常掃」（川^{かわ}底い）を請負たいという願いを認めるか否かについて返答したものです。ちなみに、牛堀村には、中小の高瀬舟や五大力、小五大力、小茶船などがあり、流通業

一	中高瀬舟壹艘	舟主	半四郎印
一	中高瀬舟壹艘	舟主	彦八印
一	小高瀬舟壹艘	舟主	孫平八印
一	小高瀬舟壹艘	舟主	権右衛門印
一	小高瀬舟壹艘	舟主	伊右衛門
一	五大力船壹艘	舟主	桑助
一	小五大力船壹艘	舟主	長右衛門
一	小茶船壹艘	舟主	武兵衛
一	同 船壹艘	舟主	五兵衛
一	同 船壹艘	舟主	善兵衛
一	同 船壹艘	舟主	文次郎
一	同 船壹艘	舟主	次郎兵衛

（表）牛堀村所有船一覧



利根川筋の河岸 (川名登『河岸に生きる人々』より作成)

の隆盛を感じさせます (表参照)。
請負を願った人物は、包紙に「水府」とあることから、水戸の人物と考えられます。その人物は、「関宿川請負人」を願う出る条件として、この辺りを流通する船から、水主一人につき鑑銭一〇〇文を請け取りたいとしています。もともとこの辺りは、川湯水の節には舁下を雇い、荷物を積み替えて、江戸へ往来していたようで、そこに眼をつけたものといえます。

が数十艘も一緒に、先・後が問題になったり、一緒に舁下に積み合せて荷物を取り違えることがあることを危惧しています。
この史料は、返答書のため、請負が認められたか否か、その結果は不明ですが、当時河川交通が決してスムーズではなかった様子を示しています。
次に、もう一点史料をあげましょう。年代は、53年後の天明6年です。
関宿三河岸(内河岸、向河岸、向河岸)の船問屋が相談して、関宿関所裏から木野崎(利根川と鬼怒川の合流点や上流)までの五里の川漕を定期的に行う取り決めをしたものです。この辺りは、浅瀬の場所が多く、通船に困難をともなったようです。そこで、竿一本につき銭五〇文を請け取り、川漕をする事になり、川筋村々にも承諾を得たとあります。ただ、それでも便利にならないときは、「竿銭」は請け取らないとの一文もあります。このことから、河川と川沿いの村々が決して無縁ではなかったことがわかります。

*

以上、江戸への重要な「川の道」である利根川に関して、銚子と深川のつながり、そして「川の道」を守るための取り決めなどについて見てきました。

実際に、川筋の所々で舁下を頼むという既存の流通システムがあるなか、川漕効果がどの程度あったのか不明です。しかし、請負人の出現や関宿の河岸問屋が「竿銭」を取り決めるなど、江戸への基幹河川としての利根川の重要性が十分に窺い知れます。

(文化財専門員 出口宏幸)



利根川に架かる境大橋より銚子方面を望む

そこには、川の果たす役割の大きさが窺えます。また、二点の史料(川漕の歴史関係)

江東外見発見伝 ― 区外資料の紹介 ―

九品仏浄真寺の接待茶釜

8月16日、世田谷区九品仏は浄真寺に行ってきました。3年に1回行われる有名な「おめんかぶり（二十五菩薩来迎会）」（都無形文化財）を見るためです。すごい人出でしたが、もうひとつの目的である宝物の虫干しではじつくりと寺宝の数々を拝見することが出来ました。宝物のなかに、「接待茶釜」と呼ばれる鉄製の茶釜があります。高さ40cmほどの大きなもので、銘文によれば、寛文8年（1668）京都宇治の宮本仁左衛門という人が両親の菩提を弔うため施主となり、釜屋六右衛門が製造したことがわかります。



釜屋六右衛門（太田六右衛門、通称釜六）は現在の大島1丁目の釜屋堀公園の付近に住んでいた、近江国（現滋賀県）出身の幕府の御用鋳物師で、代々六右衛門を名乗っており、当時の当主は初代正次でした（「太田家系譜」）。

更に、銘文によれば、この茶釜、もともと大島の念仏堂（大島3―30）にあったことがわかります。念仏堂は洪水で流されてしまい、延宝年間（1673―80）に荏原郡奥沢新田（現世田谷区奥沢）に移りました（「新編武蔵風土記稿」）。

本品は、現在のところ、現存する釜六の作品の中では最古のもので、明年3月に開館予定の中川船番所資料館（仮称）にレプリカ展示される予定です。

浄土宗 九品仏浄真寺

住所 世田谷区奥沢7―41―3

交通 東急大井町線九品仏駅下車

1分・東横線自由が丘駅下車8分

江東今昔(5)

右下の写真は大島2丁目の愛宕神社前の通りを南から北へ向かって写した、昭和30年ごろの写真です。

愛宕神社はもととは中之郷村の成就院（現墨田区吾妻橋1―14）境内にありましたが、寛永年間（1624―1644）に中之郷村の人々の移住とともに中之郷村に移り、村の鎮守となりました（一説には元禄年中とも）。大正12年（1923）に、氏子地域の中央に位置する現在地（大島2―15―4）に移転しました。昭和20年（1945）の戦災で被害をうけ、この写真が撮影されたころには、まだ仮社殿のみでした。

この付近は通称荒（新）久といわれ、当神社は荒久の愛宕神社とも呼ばれました。

この辺りには戦前まで、浴衣地などを染める染物屋が軒を並べ、染織関連の職業も多かったそうですが、戦争中に減少していきました。

現在では、ほとんどの家が2階建・3階建の建物に変わってしまいました。現在よりも道幅が広く感じられるのは、両側の建物のためでしょうか。砂利道と側溝、日除けの葦簀を立て掛けた民



昭和30年頃の愛宕神社前通り



現在

家、木製の電柱など、懐かしい景観が写真のなかに詰まっています。

計報

江東区登録無形文化財（工芸技術・漆工）保持者下崎勝喜氏（石島12―7）は、去る7月21日に逝去されました。謹んで追悼の意を表します。